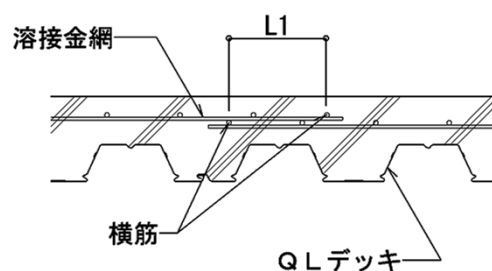


鉄骨工事 Q&A	デッキ・スタッド	メッシュ筋のかぶり	制定	2011年7月1日
			改訂	2019年4月1日

Q. 合成スラブでメッシュ筋が4枚重なる部分のかぶり確保は、どうすればよいか？

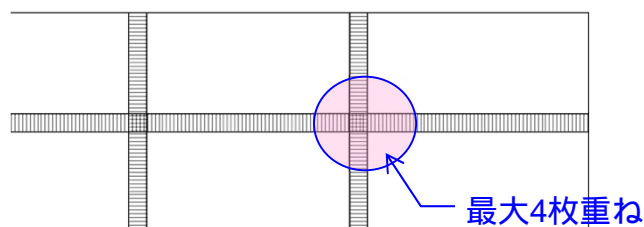
A.

溶接金網の重ね継手は、一般的に直交筋の効果を活用した重ね継手としており、応力伝達を期待する継手では、「横筋間隔+50mm以上、かつ150mm以上」の重ね継手を採用しています。

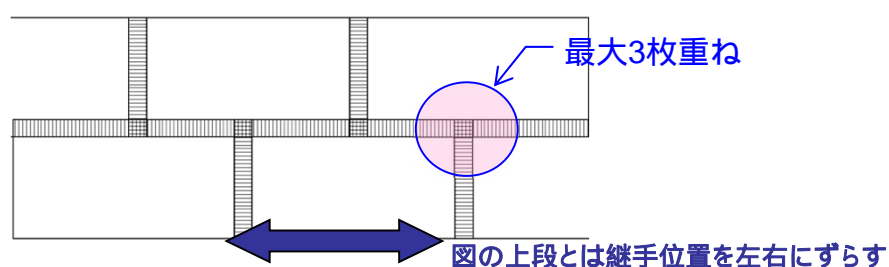


応力伝達継手の場合、重ね継手長さL1は横筋間隔+50mmかつ150mm以上とする。

規格寸法の溶接金網を端から順に並べてしまうと、溶接金網の重なりはご指摘の通り最大で4枚重ねとなってしまいますが、下図のように継手の位置をずらす工夫をすることで、最大3枚にすることができます。ただし、3枚重ねにした場合でも背の低いバーサポートを使用するなど跳ね上がり防止に工夫が必要です。



位置をずらす工夫をすると...



一方、異形鉄線を使用した溶接金網や普通の異形鉄筋を格子状に配置した鉄筋格子を使用した場合、直交筋の効果期待しない延長筋型の重ね継手(いわゆる鉄筋の重ね継手のイメージ)を採用しているケースも見受けられます。この継手を採用した場合は、重なりを緩和できるのでかぶり厚さの確保は容易になります。この延長筋型の重ね継手は性能評価機関の評定を取得していたり、特許に関連する技術も含まれていますので、詳しくはパワーマット協会や各メーカーに確認して下さい。